

総論 1

1 放射線治療の流れ

放射線治療は、がんの根治を目的とする場合と、症状緩和を目的とする場合の双方で重要な役割を果たしている。いずれの目的であっても、治療は主治医と放射線治療医の情報共有と相談に基づき開始され、診療科横断的な連携のもとで進められる。

放射線治療の流れと特徴

1 紹介・診察

放射線治療医は、主治医から提供される診療情報や検査所見を確認した上で、患者を直接診察する。その際には、治療対象となる症状の程度、原発巣や他の転移巣の制御状況、既往の放射線治療歴、併存疾患、全身状態を評価し、適応と治療方法を検討する。治療方針は、他の治療との整合性を考慮しつつ、主治医とも情報共有しながら決定される。

2 治療計画・検証

実際の治療にあたっては、まず専用の固定具を用いて治療体位を決め、治療計画用 CT を撮影する。得られた画像を基に腫瘍と周囲臓器の位置を解析し、照射範囲と線量分布を精密に設計する。その後、計画の妥当性を確認する検証作業を経て、治療に移行する。これらの準備には数日を要するのが一般的であるが、緊急照射の場合は当日中に治療を開始することもあり得る。

3 治療の実施

照射自体は1回あたり入室から退室まで10～20分程度で終了し、そのうち照射は1～2分に過ぎない。非侵襲的で疼痛を伴わず、入院を要しない場合も多いことから、患者の身体的負担は比較的小さい。特に緩和的放射線治療においては、短期間の通院で疼痛や出血、圧迫症状などが軽減され、生活の質が速やかに改善することが多い。

4 経過観察

治療期間中は有害事象や全身状態の変化に対応するため、少なくとも週1回の診察を行う。有害事象の多くは軽度かつ一過性であり、必要に応じて支持療法を併用することで、安全に治療を継続できる。また、治療効果や症状の推移は随時主治医とも共有され、全身治療や緩和医療と適切に連携することが重要である。治療後の放射線治療医による経過観察は非常に重要であり、有害事象の対応および同部位または別部位に対する追加治療の必要性を判断する目的で行われる。

このように放射線治療は、紹介・診察・計画・検証・実施・経過観察といった多段階のプロセス

から構成される体系的治療である。その過程は患者にとって比較的負担が少なく、特に緩和ケアの領域において有効性と安全性を兼ね備えた治療選択肢として位置づけられている。

主治医に知ってほしいポイント

放射線治療は、紹介に基づいて初めて実施可能となる治療であり、主治医からの情報提供は極めて重要である。以下の点を意識していただくことで、放射線治療医との連携が円滑となり、より適切かつ迅速な治療につながる。

1 治療の目的

緩和的放射線治療における治療目的は、根治や腫瘍制御ではなく、疼痛緩和・麻痺予防・止血などの症状緩和であることがほとんどである。その目的に応じて適応や線量スケジュールが決まるため、目的を明確にして主治医や患者、家族と共有することが重要である。疼痛や出血のコントロールを優先するのか、通院回数を減らすことを重視するのか、といった希望を紹介時点で伝えていただくと治療方針決定が円滑になる。

2 全体的な腫瘍の制御状況と今後の治療の見通し

病勢や期待される化学療法の有効性、生命予後などによって放射線治療の優先度や治療スケジュールは検討されるため、これらの情報提供は重要である。例えば、生命予後が短い場合は短期スケジュールが適しており、期待される化学療法の有効性が高い場合も短期スケジュールで速やかに化学療法を開始することが優先される。一方でオリゴ転移など局所制御を重要視する場合は、高線量の照射が適している。

3 照射既往の有無と部位

過去に放射線治療を受けているかどうか、その照射部位や線量は、再照射の可否や線量制限に直結する。紹介時に照射歴の有無と、可能ならば照射録、線量サマリーなどを情報共有し、実施可能性について適宜コミュニケーションを図ることが望ましい。

4 併存疾患と全身状態

心疾患や呼吸器疾患、腎機能障害、膠原病などの併存症は、治療中の体位保持や有害事象のリスク評価に関わる。また、活動度 (Performance Status [PS]) や日常生活動作 (Activities of Daily Living [ADL]) の情報は、緩和照射の適応判断に不可欠である。

5 症状の性質と緊急性

疼痛、出血、閉塞、脊髄圧迫など、放射線治療が有効な症状は多岐にわたる。症状の種類と緊急性を具体的に記載していただくと、照射計画の優先度や治療スケジュールの調整に役立つ。特に脊髄圧迫や気道閉塞は診察当日に治療を行う、緊急照射の適応となる場合がある。

6 併用療法の状況

化学療法や免疫療法、分子標的治療薬など、他の治療との併用は有害事象や治療スケジュールに影響を与える。併用中または直前の投与内容・時期を明記していただくことで、安全な治療計画が可能となる。

まとめ

放射線治療は、紹介医からの依頼と十分な情報提供に支えられて成立する治療である。照射既往、併存疾患、症状の性質、併用療法、そして患者・家族の希望といった情報が整理されていることで、迅速かつ適切な治療が可能となり、結果として患者の苦痛の軽減と生活の質の向上に直結する。緩和的放射線治療を効果的に活用するためには、診療科間の密接な連携と相互理解が不可欠である。